

スロバキア、

ハンガリーを旅して



高木 惣治
予科 10-8
航空 12-1
(東松山市)

旅のはじめに

チェコやオランダの大使を勤めた大鷹正⑧の奥さま節子夫人の案内で昨年はチェコ、オーストリーを訪問し、深く感銘したのに続き、今年にはスロバキア、ハンガリーの旅ということで真っ先に手を挙げ参加した。団長は木下矩武⑩、事務長は奥さんの和子夫人。

60 期生 3 名、副官 5 名、その他男性 2 名、女性 13 名の総勢 23 名の一行は 5 月 12 日 10 時 40 分発のオーストリア行きの飛行機で出発、12 時間半の後、定刻ウィーンに到着した。

スロバキア入国

昨年も大変お世話になったブラハ大学の教授ホルブ先生の出迎えを受け、ブラハから用意された大型バスに乗り、スロバキアの首都ブラチスラバに向かう。現地時間では午後 5 時頃、明るい大地に林立する発電用風車を眺めながら、1 時間程でスロバキ

ア入国検問所に到着、いかめしい顔をした係官にバスの中でパスポートを呈示、入国の許可を得る。10 分ほど走り、ドナウ河に面した要塞の町という感じで切り通しのような城門を入り、今日 1 日、20 時間の旅程を終わる。

翌日、昨日の疲れも取れ 8 時 30 分集合。フラブネー広場へ。広場の一角に窓から日の丸を出している建物がある。菊のご紋章もあって日本国大使館の表札が埋め込まれていた。何となく異国で友人に会ったような嬉しさを感じた。今日は土曜日、館員も不在のようだ。

【スロバキアについて】

面積は 5 万平方 km 弱、北海道の 6 割位、人口は 540 万人、共和制で民族はスロバキア人 86%、ハンガリー人 11%、その他チェコ、ルーマニア、ドイツ人など。

906 年大モラビア王国がマジャル人(ハンガリー人)に滅ぼされた後、1918 年の第一次世界大戦終了時まで約千年の間ハンガリー王国の一地方として苦難の歴史を辿る。

1526 年オスマントルコによって占領され、ハンガリーの領土はスロバキア地域だけとなり、ブラチスラバが首都になった。この地で行ったハンガリー王の戴冠式は王 11 名、女王 7 名にも上り、その中には有名なマリア・テレジアも含まれていた。1918 年チェコスロバキア独立。

ハンガリー入国

ブラチスラバの日本大使館への訪敬を止めて直ちに出発。今日は約 200 km 南のバルトン湖の近くにある温泉の街ハーピースへ向かう。1 時間程走ってハンガリー入国検

問所に到着。ここの係官は愛想よくにこやかに対応してくれた。隣にある両替所で全員ハンガリー通貨に交換し、いよいよハンガリー8日間の旅が始まる。

【ハンガリーについて】

正式名はハンガリー共和国、面積は約9万3千平方km、日本の1/4程、人口は約1千万人、ハンガリー人97%、他スロバキア、ドイツ、ルーマニア人など。

9百年頃は騎馬民族であったマジャル人が現在のカールパチア盆地を征服し1千年頃ローマ帝国の援助でクシュートバーンがハンガリー国王についた。

1224年頃蒙古の襲来により国土は破壊され住民の多くは虐殺された。1526年、モハーチでトルコ軍に敗北を喫し、以後、150年間ドナウ河以西のハンガリー、ハブスブルグ王国、東ハンガリー王国とブタを含めた旧ハンガリー王国に3分割される。

その後、1848年のベテフユーらが自由を求めて独立運動を起こしたが失敗、1867年国際情勢の流れもあって、オーストリアハンガリー君主国として独立した。

1918年第一次世界大戦終了、オーストリー、ハンガリー君主国は解体。マサリクがチェコスロバキアの独立を宣言。第二次大戦でも三国同盟側に立ち、ブタペストはソ連軍と独軍の戦場となり街は焦土と化した。その後社会主義国としてソ連の抑圧に怯えながら1993年、中欧諸国として初めて北大西洋条約に加盟した。ハンガリーの1000年間は戦争と占領の歴史である。

ドナウ河西側の旅

バスは果てしなく続く麦又麦の大耕地を走りに走る。人家もなければ信号もない。

交差点は皆ロータリー式だ。はるか低い山並みまで霞んで見える広さである。

これに比べたら日本の農業など幼稚園児にも及ばない。

ドナウ河西側は平地が多いが時々台地もある。ほぼ10kmごとに集落がある。何本か小さな川が集まっているような谷間で、人間は昔から水の集まる低い所に住み着いた事がうなずける。街には必ずゴシック建築の鋭い尖塔が2、3本見える。教会を中心に生活が成り立っているのだろう。また、道路の両側には立派なマロニエの並木がある。丁度満開の花盛りだが、中には名前が分からないが日本の狸々野村に似た幹も葉も黒ずんだ赤色の木も植えられていた。住居は2階建てで約200平方m位と思われ、どの家にも四角い煙突が2本屋根の上に突き出ている。燃料は石炭でなく薪のようで家の廻りに積み上げられている。雨の降るときあの煙突は蓋がないので、どうするのだろうと要らぬ心配をしながらバスに揺られ先を急ぐ。

途中、磁器で有名なヘレンドの街に立ち寄る。従業員1600名という工場を見学、造形、絵付けの工程を見せてもらう。磁器は矢張り東洋が先輩で景德鎮、伊万里の技術を見習ったものだ聞いた。

バラトン湖は中欧ヨーロッパ最大の湖で6百平方km、東京23区の面積に等しいとか。行けども行けども限りなく湖畔の路は続く。途中小休止の後、本日の目的地へービーズに到着。

温泉の街よろしく名もホテルアクアだ。部屋に入ると大きなタオルとパジャマが置いてある。早速海水パンツに着替えて室内温泉に入る。広さは200平方m位だ。大

声を出すな、泳ぐな、決まった場所から出入りせよ、身体を洗うな等、番台のオバサンの五月蠅いには参った。お客様扱いなんか全然しない。屋外に3面ほど100平方m程のプールがあり、ややくつろいで部屋に戻る。

今夜は近くのレストランで夕食。ワインが水より安いといわれる国、赤、白と男性女性限りなく飲み続け、こんなお客さんは初めてと云われる程の飲みっぷり。楽団も益々熱演し、宴は最高潮。チェコ人は踊りが上手。ホルプ先生は190cm、120kgもある体軀を弾ませて女性相手に踊りまくる。夜の更けるのも忘れてハンガリーの第一夜を楽しんだ。

次の日は坂を下って公園の中にある温泉湖に行く。47ヘクタールもあり、深さは36m位、36℃以下の温度で湖面には睡蓮の花が咲いている。日本の海水浴よろしく男性は意気地がないが、女性軍は水着に着替え元気よく湖面に降りるはしごから湖に入り、浮き輪を使って上手に泳いで見せる。なかなか魅力的な一時だった。

風過ぎ出発、今日はハンガリー第4の都市パーチュを見学して宿泊地モハーチまで約150kmの行程だ。パーチュ迄は高原地帯が多い。毎日のバス旅行でややうんざり気味。丁度大きな菜の花畑に差し掛かった頃、気晴らしにハーモニカを吹けとの要望に暇つぶしにと吹き始めた。最初は矢っ張り「朧月夜」である。ハーモニカの音に釣られて女性軍は一気に合唱で盛り上がる。小学校唱歌の歌声で暫し賑やかな時間を過ごした。

パーチュを過ぎた頃、一天俄にかき曇り雷鳴と共に5mの先も見えないような夕立

に遭う。バスのドライバーは見事此の俄雨を切り抜け一同を安心させた。

まだ、雨足の残る中、中世ハンガリーの運命を決したと云うモハーチの慰霊場に到着した。ここは1526年8月29日、オスマン軍に敗北し、2万人の兵士が国王ラヨシュⅡ世と共にこの原野に散ったという歴史的な悲劇の場所である。霊場には高さ10m程のポールが立ち国王を始め戦死した将兵の木彫りの人形が吊されており、降り止まない雨に打たれながら限らない哀れの思いに誘われた。

ドナウ河東側の旅

3日目はモハーチからハンガリー第2の都市デブレツェン迄400kmを越す大移動だ。途中パブリカの街カローチャに寄る。女性群は大辛、中辛、小辛と500g位ずつ3つ吊されたブロックを抱えきれない程買い込んだ。手軽な土産だろう。



大草原ホルトバージュで木下団長と筆者

ドナウ河以東は殆どが平坦な大平原である。所々に平地林がある。榆、ポプラ、白樺、赤松、そしてドイツ檜、岳樺などの植物がよく手入れされて繁っている。材木は冬のストーブ燃料となり、一部は数知れず作られているブドウの支柱に使われている。重要な産業や生活の資源で日本のよう

な何のお役にも立たない放置林とは訳が違う。

400kmは本当に遠く、日の沈む頃デブレツェンに着く。ホテルはハンガリー最古の由緒ある「アラビニカ」。この町は1848年の独立運動の折、一時首都ともなった所である。

4 日目は東部に広がる牧草地帯ホルトバージを観光。ヨーロッパ最大の自然保護区で野鳥の宝庫としても有名である。

十二、三人乗りの馬車で草原の中を案内してもらう。数人の騎手が馬の曲乗りを披露する。服装は全く蒙古的であり、帽子、袴の色合いといい全く蒙古調で、祖先は東洋系の民族に違いないと思わせる。

その後、ハイドウベセルメニイの町と思うが、一人でマクドナルドの腰掛けで休んでいると中学生らしい男女12、3人が集まってきて口々にコンニチワ、コンニチワと言う。最初は何のことか分らなかったが、日本人と分かり日本語の挨拶をしているのだと漸く気付いた。男6、7人、女4、5人のグループだが何か言ったら大声を上げて笑う。何を言っているのか全く分からないが、俺は日本人と話をしたのだと威張っているのかも知れない。

全く無邪気な子供達だ。デジカメで皆を写し、見せたら、俺にも俺にも送ってくれと言っているようだった。先生の合図で急いで帰っていったが、矢張り彼等の祖先は東洋民族で東洋に対するノスタルジアがあるのかななどと思ったりして自己満足していた。



無邪気で陽気なハンガリーの子供達

車は先を急ぎワインの街トカイへ。店のオバサンに丘の横に掘られた地下室に案内され白ワイン、「トカイ」を試飲して今日の目的地エゲルへと急ぐ。エゲルはハンガリーでも有数の美しさを持つバロックの町である。城主ドボー・イシュトバーンが1552年、20倍のトルコ軍を追い返した愛国の町と云われている。シュペラ天文台はハンガリー最古のもので階段を百段近く登れば町全体が一望できるというが、足に自信がないので止める。

また、エゲルはコクのある赤ワインの故郷で「牡牛の血」と呼ばれているピカビエールは世界的に有名なブランドである。早速町のスーパーで手に入れる。一本480円と聞いてびっくり。4本買ってケースに割れないようにしまい込んだ。

エゲルでは2泊し、最後の都市ブタペストに向かう。途中北部山岳地帯にひっそりと佇む町ホーロークへ。1987年に世界遺産に登録された。この谷の住民はバローツ

人と呼ばれ、モンゴル人に追われカスピ海沿岸から移住したトルコ系クマン人と云われ、日本の平家の落人部落に似た寒村である。この村の一軒の民家で夕食をご馳走になり、夕方、ブタペストに到着。これでハンガリー国内外一週りの約 1300km に及ぶバスによる訪問旅行は終わりを告げた。

旅の終わりに

ブタペストはドナウの真珠、薔薇などと称えられ世界遺産にも登録されている美しいハンガリーの首都である。プラテスラバ、ブタペストを除いて日本人には全く出会わない旅であった。現地を知り尽くしたホルブ先生、それに大鷹夫人の入魂の旅で、なかなか訪れることのできないハンガリーの深部を探り当てた有意義な旅でもあった。また、全員最初から最後まで笑顔を絶やさず、なごやかな中に何の事故もなく旅を終えることができたのが最高の収穫であり、9 日間約 1300kmを無事運転してくれたブラハのドライバーさんに心からお礼を申し上げたい。

